

その地方にあった処方を取りあげる臨床的な態度から出発している点に特徴があると思われる。過去の処方集を集約して事足りりとする態度に飽き足らなかつた陳延之の医学思想は、高く評価されるのではないかと思う。だからこそ、後世この本が唐令においても日本においても医師が習学すべき教科書となつたのであろう。

さらにこの『小品方』の目録から重要なことが読み取れる。『張仲景弁傷寒并方』と『張仲景雜方』の二書が引用されているが、今日通用している『傷寒論』を構成する重要な理論である「六経弁証」に相当する目次が見られないことである。陳延之が張仲景の著作を引用しながら、「六経弁証」を用いなかったのはなぜか。非常に興味ある問題である。

また編者によつて与えられた『小品方』の成書年代(上限は四四四年、下限は四七三年)はこの書以前の医書を研究する上でも、またこの書の影響を考察する上でも重要な年代である。胡乃長、湯万春、高文桂らによつて考えられた年代推定はすでに過去のものとなつた。この年代の学問的価値には、はかり知れないものがある。かならずや、中国医学史研究の一里塚となるであらう。

『黄帝内経明堂』もまた『小品方』に劣らず重要な書物である。この書が仁和寺蔵の国宝『黄帝内経明堂』に優るとも劣らない名宝であることは最近まで知られていなかった。この発見もまた編者らの功績に帰すものである。『黄帝内経明堂』が、鍼灸の古典の『甲乙経』に引用されることから、この

書の成立が非常に古い時代であることがわかる。唐の楊上善が注釈したこの『黄帝内経明堂』こそ、その姿をうかがうただ一つの書物である。この重要文化財が国宝より史料的价值が高いという編者の発見も、ある種の文献学の皮肉である。この本の持つ価値を述べ尽くすには、すでに紹介者には荷が重すぎる。ただこの書物を篤学の士に勧めることだけが私の役目である。

(猪飼 祥夫)

(発売取扱・新樹社書林、東京都千代田区猿樂町一―三―六一三
〇二、電話〇三―三二九三―五六九一、一九九二年三月刊、B
4判、九八頁、定価一五、〇〇〇円)

コンスタンス・ジョエル著、内村瑠美子訳

『医の神の娘たち―語られなかつた女医の系譜―』

医学の歴史は、決して発見や発明の、あるいは国家的な制度や事業のみの歴史ではない。またそれは偉業を成し遂げた人物のみが記されるものでもない。近年、医学の歴史、また歴史の中の「医」の問題はさまざまな角度から研究、論述され、古典的な医学史の幹から多くの太い枝が張られるようになってきている。本書はそのような枝の一本であるか、あるいは幹そのものを裏側からみたところであろうか。これは古代から現代に至るまでのヨーロッパで医に関わつた女性たちの歴史である。

著者はまず、原始時代の医療、古代の医療にいかにかに女性が関わっていたかを記す。それは決して男性に劣るものではなく、かつたにもかかわらず、ヒポクラテスの時代にはその多くが婦人科、産科に向かう傾向にあり、時代とともに女性の身体と出産に関わる専門の分野へと流れを向けていったことを指摘する。中世はさらに医療者としての女性の領域が限られた時代であった。産婆、看護婦を除くと理髪師、外科医、薬剤師などが非合法に存在したが逮捕されなかったのは理髪師のみであった。さらに数えるばかりの名の記されている女医の蔭には、多くの「魔女」という名で医療に従事した女性が存在し、宗教の場ではのちに看護婦となる女性と医療の関わりが形作られた。

しかしルネッサンス時代に至ると、かろうじて得ていた権利も女性には手放すことになる。ルネッサンスという栄光の時代に、唯一の例外であるイタリアを除き、逆に女性は医師としての姿さえ消されてしまうのである。けれども女医にとっては暗黒の時代であったルネッサンスとそれに続く一八世紀においても、ヨーロッパの中でその時代時代に僅かながら卓越した知識と技術を有する女性が、かろうじて歴史上の「女医」の点を結んでいた。というよりむしろ、著者の精査によって女医の点が結ばれたとすべきであろう。

一八世紀は看護婦とともに僅かに女性に許された医療職であった助産婦の教育と統制が始まった時でもあった。これは助産婦の医学教育という意味では重要なことであったが、逆

にいえばそれまでほとんど女性の専有領域であった産科にまで男性の支配が及ぶことになったと著者は指摘する。

一九世紀、女性に対する教育の普及から次第に医学教育に対する女性の要求が表面化してきた。始めは一人からはじまった戦いは、一八七〇年頃には大半の国で女性は正式に医学の講義を受けられるようになっていた。それはまず男女別学から始まり、女子専門学校が開設され、そしてようやく男女が全く同じ環境で教育を受けることが出来るようになるというプロセスを経るものであった。しかし教育を受けても医学博士号取得、さらに通勤助手職や専門医候補者試験などの受験資格を得るまでには、なおさまざまな難問が用意されていたのである。著者は近代からの女子医学教育と、女性が医師としての確固たる地位を獲得するまでの経過を(著者からみると現在でもまだそれは達成されていないのだが)ヨーロッパ各国、アメリカ、さらにそれらの植民地における非常に多くの事例を挙げながら述べて行く。その中で特に印象的なことは、第一次世界大戦などの戦争が逆に女医の需要をもたらし、地位を固めて行く上で重要な契機となったことである。著者はルネッサンスを女性と医療とつてのパラドックスの時代と規定したが、ここにもまさに女性と医療とのパラドックスが提示されているのである。

最後に著者は自国、フランスで現在女医が置かれている状況を分析して次のように述べている。「私たちのこの研究を通して、医療界への女性大進出と、男性医師と同等の、量的に

も、とりわけ質的にも責任ある地位への進出とのあいだには肯定的相関関係を見いだすことはできなかった。一九世紀、女性たちは医者になる権利と医学的知識という力を手にいれた。二十世紀はまだ真の力への道を女性に与えていない。……：
医療の神アスクレピオスの娘たちが、医学の力を本当の意味で男性と分かちもつようになるまでには、この先どれほどの時を待たねばならないのだろうか。

ちなみに一九九〇年一月現在の日本の医師数は男性一八万七五三八人に対し、女性二万四二五九人となっている（厚生省『医師、歯科医師、薬剤師調査』）。著者はこの数値と日本の女性の現状をどのように評価するであろうか。

本書はまさに女性の立場から書かれた、女性にとつては痛快な、また男性にとつては新たな事実に驚かされる貴重な一冊である。なお巻末の原註および日本に関する文献は参考となる。

(三崎 裕子)

(メディアカ出版、吹田市広芝町一八一―二四、電話〇六一三三五―
六九一一、一九九二年、四六版、本文二三三九頁、補遺一五頁、
二四〇〇円)

〈訂正〉

本誌三八巻四号、表紙絵説明文、五行目の(1829)は(1826)に訂正。

蛭田玄仙

とその産科

二宮 陸雄 著

四六〇ページ、上製本

図版付、十一古史料を付録

送料共 一五、〇〇〇円

〒101 東京都千代田区鍛冶1-9-1

一宮 内科

(薬書またはFAX03(3258)0088
でお申込み下さい。残部僅少。)

東京大学医学図書館所蔵和古医学書

調査用私製仮目録(一九九三年、二宮陸雄編、

58ページ、製作費三、〇〇〇円)

* 蛭田玄仙の本お申込みの方に無料でお送りします。